Japanese Journal of Applied Psychology
1983, No. 8., 35-54

討　論

最近の親子関係をめぐって

平　野　　馨（慶応義塾大学）
Kaoru HIRANO (Keio University)

斎 藤 幸 一 郎（慶応義塾大学）
Koichiro SAITO (Keio University)

奥　沢　良　雄（埼玉県立衛生短期大学）
Yoshio OKUSAWA (Saitama prefectural College of Health)

近　藤　千　恵（親業訓練協会）
Chie KONDO (Japan Institue of PARENT EFFECTIVENESS TRAINING)

青　木　孝　安（財団法人育てる会）
Takayasu AOKI (SODATERU-KAI)

昭和58年7月2日，本学会の公開シンポジウムが日本大学経済学部本館33番教室で開催されました。発言者は表記の通りであります。（発言順）各発言者から話題提供後，参加者を交えた討論が活発に行われました。本稿はその討論の内容であります。

例年はすべて速記録をもとに原稿としておりましたが，今回は各発言者の発表の主旨を，各人が一つの報告原稿にまとめた発表の形式をとっています。従って会場で発言されたものと少し異る点があると思いますが，報告原稿の方がまとまりが良いと考えましたので，この点ご了承下さい。

後半の参加者との討論は，従来通り速記原稿に，司会者の平野が少し手を入れて整理しました。

挨拶

村井：私は日本応用心理学会事務局長の日本大学の村井であります。この公開シンポジウムは，学会の恒例の行事になっておりまして，今回で13回目になります。テーマは時代に即応した問題，また応用心理学に関係の深い内容の事柄を取上げてきております。今回のテーマなどは，まさしくそのような問題ではないかと思います。4月頃から各先生にご準備いただいておりますけれども，われわれに勉強になるようなお話しが伺えるのではないかと存じます。それでは早速始めさせていただきます。

平野（司会）：皆様，むし暑い中，多数ご参加下さいましてありがとうございました。ご承知の通り，本日のテーマは「最近の親子関係をめぐって」ということで行います。親子の関係は申すまでもなく，われわれにとりまして最も身近かな問題であり，親・子それぞれにとって最も身近かな他人という関係があります。親にとって自分の子供は自分の分身という気持があり，自我関与が非常に強く働きます。一方子供は親に対して発達年齢に応じて多様なかかわりをしてまいります。そこで親は，時にとまどい，時に対決し，時には依存させるような一貫した態度を保持するに困難な関係であります。あまりにも身近かであるがために，その対応に苦慮する事態が生れてまいりますことは，皆様さまざまな生活の中で，ご経験のことでありましょう。親子間の問題は，人間が存在し続ける限り生起してくる課題でありましょう。ですから一層この問題に，日頃から関心を払っていかなければならないと考えております。

本日のシンポジウムも，このような視点から，各先生のご提言が伺えるものと思っています。また参加の皆様も，さまざまなご体験をお持ちと思いますので，後半で充分な交流が行えればと思っております。

ご提言をいただく先生方を簡単にご紹介申し上げます。

斎藤幸一郎先生は慶応義塾大学心理科卒業後，大分大学，慶応義塾幼稚舎を経て，大学文学部教育学科教授となられ，教育心理学をご担当になっています。著書は「人間心理学序説」等多数あります。

奥沢良雄先生は東京文理科大学心理学科を卒業後，法務総合研究所，前橋少年鑑別所長を歴任され，現在は埼玉県立衛生短期大学教授でいらっしゃいます。犯罪心理学，矯正教育学の分野で多くの足跡を残されています。

近藤千恵先生は親業訓練協会理事長でいらっしゃいます。国際キリスト教大学を卒業後，パサデナ市で PET インストラクターの資格を取得され，帰国後日本に親業訓練協会を設立されました。親業は米国心理学者トマス・ゴードン博士が「親としての役割をはたす訓練」の心要を提称され，世界各地に広がった活動であります。日本では昭和55年３月に協会が発足しています。

青木孝安先生は長野師範をご卒業後，小学校で教鞭をとられていましたが，教育現場の中から現在の学校教育に多くの問題を感じられ，昭和43年「育てる会」を発足させられました。現在その理事長としてご活躍中であります。青少年の野外活動の指導を中心に，今日お話し下さる山村留学は，極めてユニークな試みとして注目されております。

斉藤：子供の発達と親子関係

私は，４人のリポーターの中で現場から一番遠いところにいますので，おおまかな概論的な発言しかできない，ということで，最初にしゃべらせて頂くことにしました。

スイスのアドルフ・ポルトマン（Adolf Portmann）によりますと，人間は二次的就巣性の動物だ，ということです。彼は，爬虫類以上の比較的高等な動物の親子関係のあり方を比較研究しまして，その結果，多くの動物仲間の中で，人間だけが群を抜いて特異な親子関係にあることを発見して人間をこのように名づけたのです。

つまり，高等哺乳類の動物たち，ウマやウシやアザラシやサルたちはみな，生まれたときにすでに親とほとんど相似形で，いわばほとんど完成品に近い形で生まれ出て来るものであるために，巣というものがいらない動物たちだ，というわけです。誰でも知っているように，ウマの子などは生まれてまもなく立ち上って親ウマと同じように４本足でパカパカ歩き出します。サルの子も，哺乳類ですからはじめのうちは母乳にたよるし，親も授乳とかその他のいくらか保護的な役割もしますが，下等哺乳類のネズミとか，高等鳥類のツバメとかの親たちが巣をつくっていろいろと懸命になって子の世話をするのとくらべて，それほど子育てに手間ひまをかけてはいないように見えます。

ところが人間は，サルの直接的な子孫であるにもかかわらず，親子のあり方の点でむしろサルの正反対です。人間の子供ほどたよりない状態で生まれてくる動物は他に例がありません。親の手による養育ということなしには，人間の子は一日たりと生きつづけることもできず，人間らしく成長してゆくこともできません。そこで，ポルトマンは，人間を二次的就巣性の動物と呼んだわけであります。

他方，イギリスのデスモンド・モリス（Desmond Morris）は，彼の著書「裸のサル」の中で，人間の直接の先祖であるところの狩猟性ヒトニザルの1500万年の歴史をもった生活について描いております。

それ以前の森林性のサルの時代は，雑婚で，生まれた子はほとんど親と相似形で，巣もいらない生活であったのですが，大平原に住むようになった狩猟性ヒトニザルの場合は，生まれた赤ん坊はたよりなく，養育に大へん手間ひまかかる状態で，巣が必要になりました。狩猟によって食物を確保しなければならなくなりましたので，食肉獣たちと競合する生活でした。食肉獣たちは，鋭い爪や牙，すぐれた走力や跳躍力，夜でもものが見える視力などの装備を遺伝的にもって生まれた存在であるのに対して，狩猟性ヒトニザルは，本能の代りに，道具の発明，２本足で歩くようになったために自由になった手の使用，などによって食肉獣たちとの競合にうちかたなくてはならなかったわけです。

子の養育ということと食物確保ということのこの２つを同時になしとげるための新しい発明としてつがいの形成ということが必要になったのだ，とモリスは述べております。つまり，恒常的な夫婦関係の発明によって，メスは巣を守って子育てにたずさわり，オスは安心して他のオスたちといっしょにチーム・ワークをとって狩猟にたずさわる，といった分業が確立した，そしてオスたちは，とれた獲物はみんなで分配して，それぞれ自分の巣に持ち帰って家族にわけてやるといった生活様式であったと想像しております。また，つがい形成にともなって，貞節という新しい道具も発明され文化遺産のひとつになったのだ，ということも指摘されておりまして，私どもも，こうした点，なるほどと思うわけです。

こんなわけで，家族の形成とか親子関係といったものは，人類の祖先である狩猟性ヒトニザルの1500万年の歴史を通じて確立されてきた遺産である，ということが確認できるわけです。つまり，人間は，本性的にポルトマ

ンのいう二次的就巣性の動物として進化したのでありますが，その結果として，具体的には，モリスのいうように，恒常的な夫婦関係を保ち，「生育におそろしく時間のかかる子供たち」の養育と保育と訓練に夫婦が協力して当ることになった，そのように運命づけられてこの地球上にあらわれたのが人類というものなんだ，というわけであります。

そこでこんどは私の意見でありますが，男も女も，協力して子育てにたずさわるのだというしっかりした覚悟がないなら結婚するべきではない，あるいは，結婚まではいいとしても，子供をつくるべきではない，ということを強調したいと思います。これは，女性に対してだけでなく，世の男性に対してもはっきりと申し上げたい私の主張であります。

というよりはむしろ，こうした消極的な言い方ではなく，もっとも積極的な言い方をするなら，結婚して子供をつくり家庭というものをもつ以上は，長年にわたる子育てとか親子関係とかを，男性も女性も，人生における見逃し得ない生きがい材料のひとつとして位置づけて頂けるのではないか，ということであります。モリスによれば，父性性や母性性はすでに生物的遺伝的本性にまでなっているものとしておりますが，果してそうであるかどうかは別といたしましても，親子関係というものは親の「義務」であるが，それ以上に実は，女性にとっても男性にとっても，人間としてある種の本性に適合した，つまり積極的なある種の欲求の対象となり得るものであって，その意味でむしろ一種の「権利」なのだ，と言った方がいいように思うのです。

このごろは，生きがい論がいろいろあって，誰もが自分の生きがいを見つけようとしておりますが，私の考えでは，人の生きがいといっても，ひとりひとつだけと限られているわけではなく，すべからく生がい複数論であるべきだと思います。仕事に生きがい，趣味に生きがい，社会奉仕に生きがい，いろいろあり得ます。病床にある家族の看病に生きがい，ということもあり得ます。いくつものそうした生きがいの中で，おそらく最上位を占めるものの中のひとつに，わが子の子育てというのが大いにあって然るべきだ，と思うのです。ひと鉢の盆栽つくりにさえ情熱をもやしてそれを生きがいにしている人がいる位ですから，それと較べれば，わが子の子育てというのはまぎれもない生きがいたり得るものです。

ところで，この辺で親としての生きがいということだけにしぼって見ましても，現代では，親というものの役割自体が単一ではなく，いろいろとヴァラィティのあるものとなってきているようです。そこで，それこそ概論の授業のようになってしまいますが，教育心理学関係の教科書や参考書を広く参考にさせて頂いたところで，私なりに５つぐらいの親の役割を区別できるように思いますので，以下にそれらを列挙して見たいと思います。

(1)　生理的欲求の充足者としての親

これは子供が生まれた瞬間からの親または親代りの人の役割です。授乳，衣類その他の方法での暑さ寒さの調節，おむつの交換などですが，生まれてしばらくの期間は，親の役目のほとんど100パーセントがこの種のものだと言えるでしょう。しかし，子供が成長してゆくにつれて，親のこの種の役割の比率は次第に減少してゆき，大部分の生理的欲求は子供自身が自分でみたしてゆくようになるわけです。しかし，生理的欲求の充足者というこの概念を，衣食住のすべての面にわたっての世話というところまでひろげて考えるなら，親のこの役目は，子供が成人して，別に完全に独立して一戸をかまえて生活するようになるまではゼロにはならないのだ，とも言えます。

(2)　安全基地としての親

これも最近は，多くの著者たちによって指摘されている親の役割であって，子供が立って歩きはじめる頃の観察例などが述べられています。たよれる親という安全基地があってはじめて，見なれない対象物に対する恐れを克服して一種の探索活動をとることができる，といった観察です。後見人がいると思うからそういう勇気が出る，というわけです。

親のこうした役目は，子供が幼児期になっても，児童期や青年期になっても，いろいろと別な形で必要な役割であり続けるように思われます。小学生ぐらいの子にとって，外では泣くのをガマンしなければならないのに対して，親のいる家庭というところは恥も外聞もなく思う存分声を出して泣けるところであります。

あるいはまた，精神分析的な見方をとり入れるなら，子供にとって家庭はいわゆるカタルシスの可能な場であって，ぐちをこぼしたり，わがままを言ったりすることのできるところであり，また，そういうところであるべきだ，ということができます。

(3)　遊び相手としての親

これは，このたび私自身の思いつきの一項目なのですが，わが子を可愛いいと思って思わず抱き上げたり，頬ずりしたりするという行為がすでに遊び相手としての親の姿だと思うわけです。なぜならそのとき，子供もうれしいかも知れませんが，親の方もたのしんでいるのだからです。幼児期の子どもを近くの遊園地につれてゆく，というのもそのこと自体を親も楽しんでいるなら，遊び

相手としての親であるわけです。小学生ぐらいでは，親が，わが子の，釣り仲間，キャッチボール仲間，トランプやすごろくなどのゲーム仲間であったりもするでしょうし，もっと成長してからでも，子どもといっしょのハイキングや家族旅行などをするなら，それも，遊び相手としての親の役割のひとこまです。

ここで特に申したいことは，遊びというものはそれ自体が目的であり完結体であって，他の何ものかのための手段である必要はない，ということです。子供の遊び相手であったとき，そのひとときは，子供にとってと同様親にとっても，そのひとときを以て完結した，他にかけがえのない人生のひとこまであったのだ，というわけです。もちろん，そういうひとときをもつことは，よい思い出にもなるでしょうし，子供の人間形成に役立つかも知れませんが，役立てようとか，思い出をつくろうなどと思って遊ぶのではそれはもう遊びではありませんし，そのときの親は，子供のよき遊び相手でもない，ということになります。親も，ときには，本気で，というか，無心に，というか，子どもとの遊びにひたり切っていっしょに遊ぶひとこまをもつことも大事なんだと思います。そういうことができるほどに心にゆとりのある親であるべきだ，ということにもなりますが，これはむしろ，私が私自身に言いきかせているところでもあります。

ついでながら，最近の研究から，乳幼児期のスキンシップが長い目でみて発達にとって大事な要因だと言われてきて，このことはすでにほとんど常識になってきておりますが，私にいわせれば，そうゆう効果があると知ったからあえて「目的のための手段」として，わざとダッコしたり，マッサージのようなことをしてスキンシップにこれつとめる，というのでは親の姿勢としてまだ不十分なのだと思うのです。もっと純粋なスキンシップというか，本音から出て思わずしてしまうスキンシップというのがスキンシップの本物なのだと思うわけです。あえて奇妙な言い方をしますと，発達にとって効果のあるスキンシップは効果を期待しない本音のスキンシップの場合なのであって，効果などを期待した義務的作為的なスキンシップではかえって効果などは期待できないのだ，というわけです。

(4)　しつけ手としての親

しかし，いま申し上げたようなことを考えているからといって，私は，以前から誰でもが考えておられるしつけ手としての親の役割といったものの存在を否定するわけではありません。否定するどころか，特に子供が乳幼児期の頃には，親というものは，人類が長年にわたってうけついできた種々な文化的な規範の直接的な伝達者であることをあらためて確認しておきたいと思います。トレイのしつけ，食事のマナー，言葉，衣類やはきものの使い方などのしつけ役は親です。また，乱暴はよくない，他人のものをとってはいけない，うそはつくな，といった基本的な道徳律を理くつ抜きで守らせるのも親の役目です。

また，ボーボワール女史は「人は女に生まれない，女になるのだ」と言っておりますが，私にいわせれば，男だって「人は男に生まれない，男になるのだ」とも言えると思います。つまり，女の子が女の子らしく男の子が男の子らしくなるのは，いくらかは先天的な決定因にもよるのでしょうが，やはり，しつけ手としての親の知らぬ間のしつけの効果によるところが大部分であろうと思われます。

また，子どもが幼児期から児童期，青年期へと進んで行けばいったで，種類は異るでしょうが，やはり相変らずしつけの必要性は残ると言えます。

(5)　モデルとしての親

親は，自分でも気がつかず知らないうちに，いつの間にか子供によって，よい面につけ悪い面につけ，そっくりそのままとり入れてまねをするモデルにされてしまうことが多いということであります。

親がモデルにされる可能性は，乳児期は別としても，その後，幼児期から児童期，青年期，そしておそらく成人期になってからまでもつづくと思われます。つまり，親は，子供が何歳になろうと，思いもかけぬあらゆる面で自分がモデルとされる可能性のあることをたえず念頭に置いて子供といっしょの生活をすごす必要がある，ということです。

同時にまた，子供が青年期に入って批判力が身につく年頃になりますと，親のよくない行動があると子供はそれを見てかえって自分はそういう行動だけはしないようになる，といった，いわば反面モデルともいうべき効果が生ずることも考えられます。だからといって，親は，反面モデル的効果を期待してわざとよくない行動をとって見せる，といったこともできないわけです。

以上，全部残りなく，というわけにはゆかなかったと思いますが，大まかに現代の親の役割を５種類ぐらいに区分したわけです。そして一応のしめくくりとして申したいことは，そうした幾つかの親の役割が，子供の発達段階に応じて適切なバランスをとって果されてゆけばいいのではないか，ということです。子供が何歳になってもはじめから終りまで親が保護役だけで一貫してしまって，しつけ役とかカタルシス役とかは一切お留守になっ

てしまう，というのもよくないし，あるいは，しつけ役であることばかり考えていて，遊び相手とかモデルとかの役割については，そんな種類の役割などあり得ることさえも気づかないでいる，といったのでは，やはり具合がわるいことになると思われます。

ものごと万事，ちょうどいいのがいいのであって，いくつもの多様な役割を，バランスよく，適時適切に身に引受けることを少くとも，御自分の人生のいくつもの生きがいの中の大事なひとつにして生きてゆかれるように願って，ひとまず私の話を終りたいと思います。

奥沢：親子関係と非行

只今は，子供の健全な発達を促す望ましい親子関係についてお話がありました。そこで私は，非行少年の親子関係に目を向けて，逆な面から親子関係の問題について考えてみたいと思います。

(1) 非行少年の親子関係のタイプ

非行少年の親子関係には，①欠損・崩壊型，②拒否・冷酷型，③放任・無責任，④厳格・過干渉型，⑤過保護・溺愛型，⑥矛循・不一致型などがしばしば見られます。

これらのタイプがどの位の割合で現われるかを犯罪白書によって見ますと，昭和53年において普通を除いて，父親・母親とも，息子に対する態度では放任が約３分の１で最も多く，厳格，一貫性なしが次いでおり，娘に対しては，放任が４分の１から３分の１で最も多いことは同様でありますが，厳格は少なく，逆に溺愛が次いで多く，一貫性も少なからず見られます。つまり，放任や一貫性のなさは父母に共通して見られ，同時に，父は厳しく，母は甘いという違いもうかがわれます。このことを，53年の前後の推移から見ますと，おおむね，普通と拒否，厳格は減少し，放任や一貫性なしは増加しています。

ここで，最近の少年非行の特徴についてふれておきます。

(2) 最近の少年非行の特徴

その特徴の大変重要なことの一つは一般化だと思います。

非行は，戦前及び戦後の30年代位までは，いわば一部の少年の問題であり，その少年達は一部の家庭，すなわち，貧困家庭や欠損・葛藤家庭から出ていたと言えましょう。しかし，40年頃を境として，高度経済成長時代に入りますと，そのような家庭的背景は乏しくなります。非行少年の性格についても，幼少の頃から逆境に育ち，深い情緒的障害を負ったという者も少なくなり，知能の低い者も少なくなってきます。そして，逆に，甘え型，社会的未成熟型の少年が多くなってきます。すなわち，非行少年の家庭的・社会的背景が特殊性を失ない，一般的になってきたとこと，非行少年自身の性格に，従事指摘されていた問題性が乏しくなり，一般少年の性格に近づいてきたこと，更に，非行の内容も，万引を中心とする，いわゆる遊び型非行が主流となってきたこと，などが指摘されてまいりました。これが非行の一般化のゆえんです。

もっとも，最近の非行傾向として，傷害や強盗などという暴力的なものが増加しており，また，校内暴力や暴走族による暴力，家庭内暴力なども増加しています。しかし，この暴力的傾向というのが，実は，最近の一般の青少年・児童にも見られる傾向です。小・中学校で見られる集団いじめをはじめとするさまざまな暴力的行動にそれが見られます。総理府の青少年対策本部が54年に調査した，各国の子供と比較した日本の子供の特徴の一つにも攻撃的傾向があげられています。

要は，非行少年の性格や行動傾向の特徴は，一般少年のそれと大差なくなってきているというのが，今日の非行を見る一つの重大な視点であろうと考えております。

(3) 最近の非行少年の親子関係の特徴

非行少年の親の養育態度については，はじめに申しましたが，ここでは，少年鑑別所入所少年に対するアンケート調査資料に基づいて，その親子関係を見てみます。

（話し相手）

「家族の中で誰とよく話し合っているか」との質問に対して，非行少年は一般の少年とほぼ同様に話し合っていることが見られました。

（相談相手）

「話しがいのある相手」を質問しますと，父，母，友人などがあげられるのですが，男子については，非行・一般両少年の間にほとんど差がなく，女子については，非行女子は父をあげる者は18%で一般女子の６%より多く，母をあげる者43%で一般女子の27%より多いのでした。非行少女の方が，父母を話しがいのある相手と思っているということです。

（親をモデルとするのか）

より深いレベルでの親子関係を探るために，「家族の中で，将来，あなたの生き方のモデルとなるのは誰か」と質問したところ，男子については，一般少年の29%が父を，８%が母をあげたのに対し，非行少年は，41%が父を，17%が母をと，約２倍位あげており，女子については，一般少年の７%が父をあげたのに対し，非行少年は21%と３倍位多くあげています。母をあげた者は32～33%でほぼ同率でしたが，総じて，非行少年の方が親をモデルとしている者が多いとうかがわれました。もっとも本当に健全な判断で親を尊敬・評価しているかとい

えば，検討すべき点は多いのですが，感情的，表面的レベルでは，非行少年は，それなりの心情で親に親しみを持っているようにうかがわれました。

（親の態度に満足か）

「日常の生活を通して，父（母）の態度に満足しているか」と質問したところ，非行男子の47%が父の態度に満足し，56%が母の態度に満足しており，一般男子の父に対する29%，母に対する46%より高率でした。女子については有意差は見られませんでしたが，やはり非行少年の方が幾分多いのでした。

（親が老いたら，一緒に暮したいか）

「親が老いたら，一緒に暮したいと思うか」と質問したところ，男子については，非行少年の方が一緒に暮したいとする者が有意に多く，女子については，有意ではないものの非行少年の方が高率でした。

以上を通じて，非行少年の親子関係が，相当に，情緒的に結びついたものであること，一般少年より，てんめんたるものであるようにうかがわれるのです。

（父と母との関係）

しかし，もう一つ追加しておきたいことがあります。「あなたの父と母との関係は，どれに当てはまるか」と「不仲，父主導型，母主導型，別居‥‥」など，幾つかをあげて選ばせましたところ，父主導型が，一般の男子で42%，女子で34%だったのに対し，非行少年の男子で26%と有意に少なく，女子でも29%と少ない傾向が見られました。また，非行少年の男子の方に一般男子より別居が多く見られました。男子少年にとって，モデルとなり得る，き然とした父の存在が大切であることが示唆されているように思われました。

(4) 最近の非行少年の親子関係の具体例

次に，こうした統計的傾向について，より具体的にお話いたします。

（強制引取り）

最近，教護法に目立つ現象として，強制引取りというのがあるそうです。児童相談所や家庭裁判所から送致された少年を，親が何とか理屈をつけて引取っていくというのです。今までの養育態度から考えて，大いに不安ではあるが，親が非を改め，誠意を以て養育するからと頼み込んで，強引に引取っていくというのです。これが最近多くなり，職員はこれを強制引取りと呼んでいるそうです。

また，少年の中には教護院を逃げ出す者がいますが，その少年達は，多く自宅へ帰るのだそうです。そして，親は子供をなかなか院に帰したがらず，院の職員が引取りに来ても，かくまう場合が多いといいます。親が近所の手前を考える要素もありましょうか，それだけでなく，お互には離れがたい気持も大いにあるようだというのです。しかし，このような情緒的結びつきの中には，孤立者同志の相互依存も大いにあり得ると思われます。

（少年鑑別所での面会風景）

収容中の少年に親が面会に来る時，親は，身体の調子はどうかと身を案じ，遊び放題の息子に，つまらぬ病気などにかからないよう，つまり，性病などにかからないようにと注意し，息子は，「分っているよ。大丈夫だよおやじこそ身体を大切にしなよ。」と父の身を案じます。言葉だけをきいていますと，好ましい状況のようですが，事実は，子供は性病にならないように，これからも注意して遊び続けるでありましょうし，父親はといえば，家で毎日酒びたりでアル中気味なのです。

教護院の子供が逃げ帰った家に待っているのは，こういう類の親でありまして，そこへ何故逃げるのかといいますと，親が恋しいのではなく，院より家の方が自由で，好きなことができるから，というのがより強い理由のようです。

（酔った母からの電話）

夫と別れ，一人で働いている母親が，夜遅く，院に電話をかけてきて，子供のことを案じて，あれこれときいてくることがあるそうです。しばしば，酒をのんでかけているように察せられることがあるといいます。つまり夫と別れた母親が，生活の疲れから一人で酒をのみ，心乱れているような時に，淋しさの余り電話をかけてくると考えられるというのですが，母親の不健康な生活と，その母親の子供に対する屈折した愛情が察せられます。

一口に言って，家では自由がきく，親は自分を愛して何かぐあいの悪いことがあればかばってくれる，そのような親子関係が，最近の非行少年の一つの典型のように思われます。すなわち，親は子供に愛情は持っているが，しつけがないということです。

では，このことは，非行少年の親子関係にのみ見られることでしょうか。

(5) 一般の親の養育態度に見る甘育

今日，一般の親子関係で，過保護，甘やかしはしばしば指摘されているところです。その結果，社会的に未成熟で，欲求不満耐性のない子供が，思春期になって社会的挫折を体験するとき，短絡的な破壊行動を，最も安全な対象に向けて行うのが家庭内暴力であろうと考えられるのですが，この家庭内暴力は我が国だけに見られる現象であって，それほどまでに，我が国の親の甘育は世界的に目立った特徴だといえましょう。

(6) 一般の親の養育態度に見るしつけの欠如

このことを端的に示すものが，総理府青少年対策本部が行なった日米青年の社会意識の比較調査です。そこには，我が国の親が，我が家中心，我が子供中心のしつけはするものの，公共生活，社会生活についてのしつけは，アメリカの親の何分の一位しか行なっていないことが示されていました。すなわち，我が子の話し方，挨拶の仕方についてはよく注意するものの，公共の場所を汚さない，行列の割込みをしない，電車や図書館の中で人の迷惑になるようなことはしない，などの社会的しつけには大変無関心だと報告されていました。これは，昭和53年時の調査ですが，この傾向はその後改められるというよりは，30歳代位の若い親達によって，むしろ著しくなっているように思われます。

日本の親には，昔から子供をつつみこむような深い愛情があり，どこの国の親にも負けないものがあったと同時に，社会的しつけもありました。恩を知ること，他人に迷惑をかけない，忠義，孝行，何らかの信念に基づく社会的しつけがありました。今日は，子供への愛情は依然としてあるけれども，社会的しつけがなくなったと言えましょうか。

要は，非行少年の親子関係の特徴は，一般の家庭に見られる特徴でもある，というより，非行少年の親子関係は，一般の親子関係の一つの典型であると考えられないでしょうか。

(7) 一般化の変容

以上に述べて来た，非行少年の親子関係の一般化には，最近，一つの変容が見られてきました。

ごく単純に申しますと，伝統的・破局的親子関係が再び増えてきたようだということです。例えば，横浜の方で起りました浮浪者殺傷事件の少年達は，いろいろ報ぜられるところによりますと，そのほとんどが，欠損，葛藤，崩壊家庭の少年だと言われます。その他にも，最近マスコミで報ぜられる少年事件の中には，著しく家庭環境の悪い例が目につきます。それも幼少の時からその逆境にさらされた少年が目につきます。こういう少年達はもちろん今までも少数いたのですが，40年代後半から50年代前半位までは少数グループだったように思われます。それがここ２・３年，少しずつ増えてきたように思われます。大きく言えば，戦後から30年代までは葛藤・貧困が主たる背景であり，その後，一般家庭化したのが，最近，再び葛藤型が増えてきて，今は，甘育型と葛藤型の二つに分極化してきたとも考えられます。

けれども，この分極化は，やはり，一般化の中で行なわれているといえましょう。つまり，最近の不況や社会病理を反映してか，年々，共稼ぎ家庭，離婚，別居などが増加し，母子家庭，父子家庭も増え，そこには，一口に言ってマターナル・ディプリベーションによる情緒障害型の非行少年を生み出すような状況が増してきたように思われるのです。本当の愛情がうまく子供に伝わらず，子供との接触不足を金品を与えることによって補おうとする物質主義的，金銭主義的傾向すら見られますが，こうした親の態度の中に，子供は精神的・情緒的に貧しく，殺伐な，そして反社会的，自己中心的，享楽的な特性を形成していくように思われます。そして，こうした傾向は，共稼ぎ家庭や片親家庭だけでなく，もっと広く一般家庭の中にもまんえんしているように思えるのですがいかがでしょうか。

(8) 暴力的傾向の背景

最後に，最近の非行の暴力的傾向と親の在り方との関係について述べておきたいと思います。

暴力を説明する幾つかの理論のうち，親の態度に関連のあるものを二つ取上げ，簡単にふれておきます。

一つは，アンナ・フロイドのいう攻撃者への同一視，圧倒的な強者の攻撃にいつも曝されていると，攻撃者に同一視し，身を守ると同時に，他を攻撃するようになるというものです。我が国の子供がおかれている社会的状況は，アメリカの ABC 放送が「圧力がま」に入れられているようなものだとたとえています。とすれば，いつか，子供達も何らかの強者に――例えばボス，集団――同一視し，より弱い者への攻撃的傾向を身につけてくるかもしれません。集団いじめなどはこうした説明が当てはまるかもしれません。なお言えば，これは子供達ばかりでなく，大人にも見られる傾向ではないでしょうか。巨大な権力者に不満を抱きながら，抵抗をあきらめ，いつか長いものにまかれろ式になり，その横暴を許し，弱者切捨てに傾いているところがあるとすれば，これも攻撃者への同一視と見られるでしょう。こうした親の生き方と子供の攻撃的傾向とが全く無縁だとは言い切れないような気がしているのですが，いかかでしょうか。

もう一つは，グレゴリー・ベイトソンのダブル・バインド・セオリーです。これは，相反する，かつ，抗しがたい強力な指示・束縛にあうと，分裂病が爆発をもたらすというものです。そして，我が国の子供達には，相反する強力な指示があるかといえば，一口に言って，建前と本音の相矛盾する指示が与えられているといえましょう。「皆と仲よく」と教えられるものの，現実は競争社会で勝つことを要求されるような社会状況――価値の多様化，社会病理の進行をはらんだ社会状況――を背景とするとき，最近の養育態度に見る矛盾，不一致や放任の増加が，一層よく，理解できるように思われます。

(9) まとめ

以上のことを考えますと，非行を生む親子関係の特徴は，一般の親子関係にも見られるし，子供を暴力的にする背景には親や成人の生き方がかかわっていると言えそうです。

日本の子供には，我が子中心でない，もっとも社会化された愛情が注がれねばならない，そのためには，親自身がまず社会的視野を持ち，社会的に成熟する必要があるといえないでしょうか。

近藤：親業――いま家庭で何ができるか

子を生めば親になっても，生んだだけでは親としての役割を果たせたとは言えません。「子どもが，身体的にも精神的にもまた社会的にも一人前になるために育てる」親の役割は大変なものであり，これ以上に能力と努力を必要とするものは仲々見あたりません。そこで，親としてどのように子供に接したらよいのか，ということを，親業ということばでまとめてみました。そして，親業訓練講座という名称の下に，親の役割の中でも，子供に対する接し方――親子の人間関係――についての学習会を広げていく活動を私は行っています。その立場からいま家庭でなにができるのかを考えてみたいと思います。

(1) 親の学習会

親業訓練講座は，親子の間の二方通行のコミュニケーションについて親がトレーニングされるところですが，7週間に7回3時間ずつ，8回で終了です。訓練は25名の小集団で行い，ロールプレイやスモールグループ・ディスカッションを通して学ぶ体験学習であることが1つの特徴といえます。

(2) 親業訓練の目的

親と子の間に共感的理解が存在することがよい親子関係と考え，コミュニケーションの技能を親に訓練していくことで，親と子の間に愛情と理解の心のかけ橋をかけることを目的としています。親から子に対する共感的理解が生まれ促進されることで，子から親に対する共感的理解が促されることも多く，親への訓練による働きかけが親子の間に二方通行の共感的理解を生むことも珍らしくありません。

日常生活の中で，親と子の心のかけ橋が必要と感じられることも多いのです。例えば，親が子を叱るというときですら，叱る親の気持が子に理解されて初めて親の愛情が子に伝わると言えましょう。「何でそんなにうるさく言うんだ。親なんて何もわかっていないくせに」という子供の反応であれば，親が子を思う気持も生きないのです。叱るという行為においてすら，親の気持が子に理解されるということで目的が達成されるのであって，愛情だけでなく，愛情と理解の両方が必要なのです。親業訓練は，その愛情を理解させるという，「理解」の部分に働きかけるために，コミュニケーションの技術を親に提供し訓練していく活動です。

(3) 親業訓練の内容

親と子の間に共感的理解を促進するために，

1. 聞く
2. 話す
3. 対立を解く

という三つの柱を中心に，親を訓練していきます。

1. 聞く――「能動的な聞き方」

親が日常生活の中で子の心を「聞く」耳をもつようにカウンセリングで言う Active Listening（「能動的な聞き方」と訳していますが）を親に身につけさせます。子供が悩んでいるときに，ああしたらいい，こうしたらいいといったアドバイスをしたり，それではダメだと批判するのでなく，子供自身がその悩みをのりこえられるようにするために親は手助けするのだ，という立場から，親は子どもの心に耳を傾けるのです。親が共感的理解を示しながら子供の心を聞いていくことで，子供の心が開き，悩みについて親に語りやすくなります。聞くことの目的は，子供に話しやすくさせることであり，子供のホンネを語りやすくすることです。能動的な聞き方の基本にあるのは，子供は，自方で存在価値のある人間でありたいと思っているということ，子供は信頼できるんだ，自分で考える力をもっている，ということです。親が共感的理解を行うことで，子供にとってホンネの語れる安全基地が生まれ，ストレスやイライラを発散してカタルシスがおこる場所が家庭の中に生まれることになります。子供の心に耳を傾けることは，決して甘やかしでなく，気持を聞くということは「それでいいのだ」と言うことではないのです。「学校に行きたくない」という子供の，「行きたくない」という気持を理解するということであって，「行かなくていい」という親の判断を与えることではないのです。共感的に理解することで，子の気持を理解しながら，子の思考を発展させるという対応がここで言う「聞く」ということです。

2. 話す――「わたしメッセージ」

親は子どもの気持を聞いてばかりはいられません。親の気持を，子供が反発しにくい形でわかりやすく表現していくための一手法として，「わたしメッセージ」とよばれるものがあります。これは，話すときに，「あなた」ということばを主語に語るのでなく，「わたし」ということばを主語に語ることから「わたしメッセージ」とよ

ばれます。例えば，子供が夜，約束の八時ではなく十時に帰ってきたような場合に，

「(おまえは) いまごろまでどこをウロウロしていたんだ」

というかわりに

「(わたしは) 心配していたんだよ」

と語っていこうということです。こうすることで，親は相手を非難することが相手に反発を感じさせるという道をたどらなくてすみますし，「わたし」で語ろうと努力することで，「いま自分は何を感じているか」という自分の気持を確認できますので，その感情の整理と発散が「わたしメッセージ」により可能になります。さらに，「わたしメッセージ」で自分の気持を出すことで，自分の気持をうけいれるという，自尊と自己受容にむかう一つの行動をとることができ，親の精神衛生上の効果も期待できます。さらに，子供に対し，自分の感じているものをより明確に伝えられるので，より透明なガラス張りの存在でいることができ，親のホンネを子供にしらしめやすくなります。そして，親のホンネにふれた子は，親の姿勢を理解しやすくなり，親を乗り越えていく手がかりを与えられることになるのです。

3. 対立を解く——「勝負なし法」

親と子であっても別の人間であることに変わりはなく，対立があるのはあたり前，というところから親業訓練は出発します。大切なのは，親と子の対立をいかに解決するかであるということから，親子の話し合いで問題解決をすすめるための一手法が「勝負なし法」です。「勝負なし法」では，親のリードで，デューイ (Dewey, J.) の言う思考の六段階を意識的にすすんでいきます。

すなわち，

1. 問題の定義
2. 問題解決のための案を出す
3. 案の検討・評価
4. 3.の案の中から1つを解決策として
5. 4.で採用した解決策を実行に移す
6. 実行した結果を評価する

という六段階で，親と子で話し合いながらすすむことで共通の課題として問題を解決していこうとするものです。

以上のような三つの手法について親が訓練され，1週間に1度，3時間かけて1つのこと（例えば「能動的に聞く」ということ）を同一にプレイやゲームなどをしながら学び練習した後で，次の週に会うまでの一週間の間に，親は，家庭の中で実際に習ったこと（「能動的に聞く」）を実践することが，宿題として課されます。そうして，その親子の対話を紙に書いて再現し，次の週の講座にそれをもちよって，互いに成果や疑問点について話しあった後で，さらに新しい次の項目について学ぶという，積み重ね方式で学習会はすすめられていきます。また，家庭での実践が求められることから，まさしく家庭での体験をもとに先に進んでいくので，参加者の身近な生活への応用ができ，訓練期間中の家庭の変化を経験できることが多いのも，参加者の学習意欲をさらに刺激することになるようです。

(4) 訓練の効果

こういった訓練学習の内容と形態で，実際に参加者である親に伝わっていくものは，親としていかに子育てに臨むべきかという考え方と姿勢です。すなわち，親の責任と義務は，子どもが自分で自分の幸福をつかめる人に育てること，すなわち，ある意味で親がいなくても一人で生きていかれるような生きる力を子供につけてやることであり，そのために，子育ては，いかに親子が互いにうまく離れていくかという，親離れ子離れのプロセスであるということが明瞭になり，しかもそれを実現するための方策が親に与えられます。さらに，人生の所有権ということ——すなわち，子供には子供の人生があり，親には親の人生がある，ということが，体験を通して学習されます。親が，自分の願望実現の手段や代償的満足を得るために子を利用することは不当であり，またできないことであることが伝わります。さらにその延長線上では，子には子の人生があり，親には親の人生があるのだが，子の人生は子が歩むとして，それでは親である自分の人生とは何であるのかという，親自身の生き方の問い直しが行われざるを得ないことになります。親業というのは，まさしく，この親自身の生き方を問われるが故に親業なのです。親を問題とするのであって，子育てというような子についての学習との違いが，実に，このところにあるのです。

効果測定の研究報告

静岡県および東京女子大学柏木研究室のご協力により，訓練効果の客観的測定が，1982年9月から11月にかけて行われました。

被験者は，親業訓練講座の受講生である母親達75名とその子ども50名です。母子共に，受講する前と，二カ月たった講座の終了した時点の二回，質問紙による調査を行い，比較しました。

その結果をみますと，訓練終了後は，その前に比べて，

1. 親がイヤだ困ったと思っていた，子どもの問題行動の75%が解決し，

2. 親子の間に距離が生まれ，母子一体感が減少，
3. 育児の自信の回復がみられ，
4. 子供から離れて自分の人生を歩む意欲が生まれている，

ことがわかりました。

この結果をみますと，1. の問題行動の解決により，親子の間の葛藤が少なくなることで，互いに暖い気持を相手にもちやすくなり，さらに，2.と4.でみられるように，子育ての姿勢が明確になり，その結果3.が感じられるのではないかと考えられます。さらに，訓練を通して親の考え方が変化し，それが子供に対する親の接し方に変化を生み，さらにそのことで子供の親に対する対応が変化していくことが考えられます。調査では，親が子に対して学習的傾向になるのは，親がそう変化したと認める調査結果だけでなく，子供の側にもその親の変化が認められているという結果が出ており，訓練が単に親の意識の中で効果があるだけでなく，親を通して子供にも変化を生むものであることが確認されたのです。

訓練は，日常生活の中で，親と子の接し方が変化することで，愛情と理解の心のかけ橋が親子の間にかかれば，それが家庭の外でストレスにさらされた子供の精神の安定・情緒の回復を可能にし，問題防止につながるという，いわば予防的役割を果たそうとするものです。従って訓練の参加者の大部分（80%）は，特に親子の間に問題のない人が来ています。そして，その効果としては，アンケートの記入をみてみますと，

親は

1. 子供の気持がわかるようになった
2. 余裕をもって子供に接することができるようになった
3. おこる回数が減って，家庭が明るくなり楽しい雰囲気のときが多くなった
4. 子供の問題を先まわりしてとりあげて「ああしろ」「こうしろ」ということがなくなってきた
5. 子供が自分で自分のことに取り組むことができるようになった
6. 子供の状態が理解できて，今までより一層子どもが好きになった

というもの，そして，子供の側については，

1. 子供が前より気軽に話しかけるようになった
2. すぐに反発しなくなり，親の話をきいてくれるようになった
3. 落ち着いてきた
4. 明るい子供になってきた
5. ヤル気がでてきて，自分から行動する自主性がでてきた
6. 自発的に自分の考え・意見を言えるようになった

などという人が多くなります。

今までの参加者は，中学生・高校生が例外的にいますが，大半は20代から70代に至るまでの方々で，親である方々が中心ではありますが，それ以外の人もきています。80%が女性で，20%は男性ですが，これは，講座の開設日との関係もあり，夜間や土曜・日曜日には少ないことに関係していることも考えられます。現在では北海道から沖縄に至るまでの地域で，200名の親業訓練のインストラクターが各々の地元で，地域活動としてこの訓練活動に従事しており，全国的な広がりがでてきました。

参加者の20%位の方々は，「親子の間に現実に問題がある」ので参加なさったのですが，その「問題」は，例えば登校拒否，非行，心身症（チック症など），吃音，身心障害（自閉症）など，様々です。そして，中には，登校拒否の子ども，家庭内暴力の子どもが，親が訓練に参加することで逸脱行動をしなくなる例もでてきており，親の力の大きさに驚くことが多いのです。神奈川県の中学生男子で学生服の洋ラン，浮世絵の裏地つきなどを着て，小学校の教師のところに出向き，「オレをこんなにしたのはお前のせいだ」などを言っていた子供が，親が受容的態度に変化していくに従い，中学生としての行動をとるようになり，制服もみなと同じものを着ていくようになったり，埼玉県の女子高校生が登校拒否から立ち直ったりしています。また，親業のインストラクターの中には，こういった活動を青少年補導員・指導員，保護司としての活動に生かす人もでてきており，予防こそ最大の治療といった感を深くしています。

現在，子供が病気になったり，逸脱行為を行った後で相談できる機関は警察，児童相談所をはじめいくつか存在しますが，逸脱行動がおこってからでは遅いのです。そういう行動がおこらなくてすむように，行動科学の分野での研究成果を一般の家庭生活に生かすべき一つの道として，こういう体験学習を提供することで親への援助を行っていくことを，大変有意義に感じています。

おわりに

21世紀に生きる子供たちは，人から言われて行動する意欲もなく，創造力もなく，思いやりのない，自己中心的で機械的なロボット人間でなく，価値観の多様化する中でさらに新しい価値を創造できる，人間的な，意欲と思いやりと創造力のある人でなければならず，そういう人を生んでいく大きな力は，今の親の手の中にひそんでいると考えます。親の力を最も大きく効果的にするため

に，親は情報を手に入れたからと満足するのではなく，行動をすべきとき，日常の行動を通して自分の考えを実現すべきときがきていると考えます。もはや受け身で情報を待っていてもまどわされるだけです。情報を選ぶ主体は自分であることを認識し，自分をみがき，主体的に行動するための方策を手に入れ，行動すべきときがきているのです。そのための親への援助を提供していく活動に誇りを感じていますと，「求められている」との実感をもっています。さらに，この活動は，親としての自衛活動ともいえ，また，専門分野の研究成果や知識を一般化していく上でも有意義な活動と考えます。

青木：山村留学における親離れ子離れ

（財）育てる会が，青少年の社会教育団体として実施している事業に，「山村留学」があります。

まず「山村留学」の概要を記します。

山村留学とは，都市化社会に住む青少年（小学生・中学生）を，長期間――一，二年間――自然の豊かな山村に住まわせ，現地の学校に通学させるかたわら，様々な体験をさせるというものです。

子どもたちの生活の場は，月の三週間，三，四人ずつ，一軒の農家で生活し，月の一週間は，育てる会の施設に会員が集まって集団生活をするという方法をとっています。

農家生活におきましては，違年齢構成による擬兄弟関係の体験，そして農家の夫婦を中心とした家族体験を主眼としています。

また，育てる会の施設での生活では，集団生活を中心に，基本的生活習慣の体得，労働体験，自然接触体験を主眼としています。

学校教育の特徴としては，小規模校故，きめ細やかな個別指導が受けられることがあげられます。

以上の説明でおわかりいただけることと思いますが，山村留学というものは，山村の学校に通うという目的でなく，農家・施設・学校という三つの場での生活を踏まえた山村生活留学という意味であります。

(1)　山村留学参加動機に見る父母の姿

山村留学は，あくまで健常児を対象としています。しかし，参加の動機を分析すると，都市化社会の家庭・学校・社会の持つ問題点と深くかかわっていることに気付くことが多くあります。まず，主動的参加では，父母が共に，確固とした教育方針を持ち，それに基づいて参加させている，つまり子どもの成長期には，どうしても集団生活体験・自然接触体験が必要であるという考えのもとに参加させている場合です。このケースは，父親主動型が多いと思われます。

次に，受動的参加（治癒効果を求めて）があります。

このケースのほとんどは，母親主動型といって良いでありましょう。母親の心の中にある，子どもに対する何等かの不安感が参加の動機となっているケースです。次に，母親の不安感の要素をあげてみましょう。

(1)　子どもの健康に関する不安

慢性的湿疹，アレルギー性といわれる様々な症状，過度の偏食に起因する虚弱体質，薬品と医者依存に対する不安

(2)　子どもの環境不適合不安

友人が少ない，友人とうまくやっていけない，仲間はずれにされる，学級担任としっくりいかない，学校へ行きたがらないのような問題です。

(3)　子どもの無気力に対する不安

とにかく毎日の生活に気力がない，遊びにも，学習にも興味を示さない，何が楽しくて生活しているのかまったくわからないなどがあげられます。

(4)　都市化社会の環境不安

通学距離が短く徒歩時間が少ない。テレビ，マンガの見すぎ，盛り場のゲームセンターの出入り，豊富な品物と使い捨て生活への不安，大気汚染と健康への不安，食品添加物と健康への不安をあげることができます。

(5)　学校教育への不信

つめこみ主義，受験一辺倒の教育への不信，塾通いへの疑問などにかかわる問題です。

(6)　過去の子育てへの自信喪失

幼児期から今日までの子育てを振り返って，生活習慣，学習習慣のしつけ方にまったく自信を亡くしてしまった場合があげられます。

以上，山村留学参加動機にみる母親の不安感をあげてみました。

(2)　母親の子ども認識の「ずれ」

母親の持つ子どもへの不安の中には，事実として受けとめなければならぬものもありますが，その不安認識の中に，「ずれ」の部分のあることを見逃すことができません。「ずれ」には次のようなものがあると思います。

・過意識のずれ

特に一人っ子の母親に，この傾向がみられます。子どもの健康について，アレルギー性体質であるということを固く信じきり，薬品依存が過度になってしまっています。その他，この意識がすべての生活面にわたって強く，結局は，母親自身が情緒不安に陥ってしまっています。

・過期待のずれ

子どもが無気力であるとか，環境不適合であるといっても，その子の個性，特性もかかわっていることでありますし，また，子どもは発達段階を追って成長・変化していくものであるから，常に完成した，良い子の状態を要求しても無理なことであります。

・劣等意識のずれ

子どもの日常生活態度の中に，他の子どもと違った要素を持った場合に，このずれが見られます。だらしの無い子，約束の守れない子，学習習慣のついていない子，奇行のある子などを持つ親は，どうしても一般的な子どもを標準にし，「わが子は変わっている。やはり私の育て方が間違っていた」と意識してしまいます。

「ずれ」の問題は，簡単に言えば，一人ひとりの子どもの実態に対して，母親が客観的認識をなし得ず，主観的な解釈をし，過度の意識を持ち，右往左往している状態であります。これが，子どもに対する過干渉となっていきます。こうした母親の精神状態の背後には，適切な子育て情報の不足ということと，父親の存在の稀薄さが指摘できましょう。さらにいわゆる，核家族化の問題と都市化社会の孤独性が浮彫りにされてきます。

親の子どもに対する認識の「ずれ」を放置し，そこで親子が葛藤をくりかえしているところに目を向ける必要があると考えます。親離れ子離れの問題は，この点の認識から出発すべきでありましょう。

(3)　山村留学における親離れ子離れ

山村留学のシステムは親子の生活の場を作意的に分けることから始まります。その結果，様々な現象が出現いたします。そして，親離れ子離れが，かなり理想的な姿で実現していきます。

これから，その様子を子どもと父母にスポットをあてて述べてみたいと思います。

(1)　子どもの自立（親離れ）の過程

まず，施設での集団生活を通してみますと，それは親もとを離れての生活ですので，集団での助け合いがあるといっても，子どもたちは日常生活の一つ一つを自分で処理しなければなりません。

特に子どもたちに要求されますのは，基本的生活の技術・習慣であります。起床・排便・洗顔・食事を，短時間に，要領よくすませることは，近頃の子どもにとって大変抵抗があります。このことは年々退行現象を示しています。

この生活技術を身につけ，習慣化するのには三カ月を要します。こんな地味なことですが，このことが子どもの生活を成立させる基本であります。一般的に都市の子どもは，知識量が多いのですが，こうした基本的生活力に欠ける者が多くいます。

つぎに大切なことは，自由を保証してやることであります。

日常生活の中で，一定の枠を設けてその中で自由な行動を認めることです。当初は，無気力，無感動，無行動であった子どもも，必ず何かに，特に自然の事象に興味を持つものです。自由の保証とは待ってやることです。何らかに興味を持った子どもの目は生き生きとしてきます。

一日の生活の中に，体を動かす，動かさざるを得ないような条件を設定する必要があります。体を動かせば新陳代謝が盛んになり，食欲が出てきます。間食はできるだけ禁止します。成長期にある子どもの筋肉は，毎日，思い切った伸縮活動を要求していると思います。この場を必ず与える必要があります。

それからまた是非必要なことは，どんなことでもいいから，達成感を体験させることであります。最初に立てた目標を，放棄させず，はげまし，がまんさせ，やり通させることです。こうした中に，欲求不満耐性がついてまいります。そして，何にも増して重要なことは，集団の中の一員として，自己の存在に自信を持ち得ることであります。

以上，子どもが集団生活の中で自立する，いくつかの要素をあげてみました次第です。

(4)　家族集団体験としての農家生活

農家の生活の特徴は毎回の食事が，必ず全員が揃って行なわれることです。この時にかわされる会話を通じて，お互の存在を確認し合うことが，子どもたちの心の安定に大きな役割りを果します。また，家族で力を合わせての農作業も重要な意味を持っています。

農家生活を通してわかったことは，一つ屋根の下に住む者が，互いに人格をさらけ出し，交流し合っていく中で，子供たちが精神の安定を得，そこから自立していくということであります。家族が家族として機能しているか，ということが大切なことであります。

(5)　学校教育の中での集団生活

小規模校であるので学習の細かい点に指導の手が届くことはいうまでもないことですが，それにも増して大きな特徴は，あらゆる学校行事，学級会活動にすべての子どもが参加できるということであります。

能力のない子どもの参画も，皆が静かに見守り，待ち続けてやることが可能です。つまり，学校とは学習の場であると同時に集団生活の場であることが強く出てきます。

子供たちは，こうした集団参画体験により，集団の

中における自己の存在を意識するようになっていきます。

(6) 子供から隔絶された親達の姿

山村留学の趣旨を理解・納得した親達であっても，子供と分かれた当初は，心の動揺をかくせないでいます。それまで，常日頃，何かと子供のことにかかわっていた親ほど，この傾向が強くみられます。しかし，遠方に住んでいる故，いかんともしがたく，唯一の交流は手紙のやりとりです。こうした親達の心の動きも，三カ月ほどを経過すると，あきらめに似た落着きを見せてまいります。

そして，月一回，生活指導担当者から寄せられる，子供の生活状況報告に目を通しますと，わが子の行動の様子につれて，それを懸命に読み取ろうといたします。これは極めて大切なことであり，子供を客観的に，冷静に見つめる機会となるのです。わが子がとっている一つの行動事例について，夫婦で話し合うきっかけができるのです。

幼児期からの育て方，しつけ方，父親のあり方，母親のあり方，家庭のあり方等について，反省と分析が加えられる機会になります。

こうした過程を通じて，親の中に，われとわが子を，冷静に読む力と習慣がついていきます。

この中にこそ，親の子離れの重要な契機が宿っているといえましょう。

まとめ

以上，子どもの親離れ，親の子離れの契機のいくつかについて，山村留学という実践活動の中に見出して来た経過であります。要約すると，子供の親離れのためには，子供の自立を促す，いくつかの場がぜひ必要です。

集団生活への参画により，生活の技術の習慣化，家族生活の場，学校生活への参画，そして，自由の保障，労動の場，運動量の確保といったことがあげられます。

親の子離れの要となるものは，親が冷静に子供を「読む」姿勢を持つことであります。

では，今日の都市化社会，核家族の中にあって，以上のことを実現するのにどのような問題点があるでありましょうか。

まず，学校教育の場については，大規模校の解消でありますが，これは行政対策にまつしかありません。日常の指導にあたっては，学校行事，学級会活動の多様化を計り，子どもたち全員の参画を計画する必要があります。

つぎに，人格形成の場としての家庭ですが，核家族化はますます進むであろうし，合わせて，父親は職業の関係で，ますます家庭から遠ざかることが予想されます。家庭というものは，ますます，人格形成機能を失なっていくということも起りうるでありましょう。

そこで，ここに，新しい教育の場の出現が必要となってまいります。都市化社会，核家族化の教育機能低下を補充し，更に，未来の人間像に標準を合わせた教育の場が必要となってくるでありましょう。

これは，社会教育活動，とりわけ多彩な青少年団体活動の活性化が急務となってまいります。

親離れ，子離れも，こうした施策の中でその解決を計られるべきであると考えます。

斉藤（三名のスピーカーのまとめ）：

お三人の先生方のお話をきいていて，ひとつ共通したこととしては，最近の親は，もっとやはり親としての自信のようなものを取りもどす必要があるのではないか，というのが私のいまの感想です。

奥沢先生のお話の中にも，親がわが子に対してまるではれものにでもさわるような態度で接していて，結果として甘やかし過ぎになるということがありましたし，近藤先生の御発言の中の重要な御指摘のひとつに「子どもの自発的成長力を信ずる」ということがありましたが，親はまさにわが子の基本的な成長力という点で信頼感をとりもどすべきだと感じました。青木先生のお話について言えば，わが子を１年間なり山村留学に出したことの効果のひとつに，やはり，この１年間，子どもが山村でのきびしい大自然の中での生活に耐えて，たくましく成長して帰って来たことによって，親があらためて子供をたのもしいものとして見なおし得た，ということがあげられると思うのです。

先日，大学での私のゼミの学生のひとりが，自分の子が青年期になって家庭内暴力や学校内暴力の子になるかも知れないので親になりたくない，などと発言しましてその発言が私にとってショックだったのですが，どうも最近は，教育問題を扱った週刊誌の記事などでは，読者に心理的ショックをあたえたい一心からか，子供への不信感をあおるようにあおるようにという方向へのねじまげや脚色がなされ過ぎているように思います。一種の情報公害であって，これが世の親たちの姿勢に重大な悪影響を及ぼしているのではないか。結果として親たちが，子供不信の大前提に立ってわが子に対するから，子供は，かえって，親からの不信の対象とされるにふさわしいような行動をとるようになってゆく，という一種の悪循環のようなものが生じることが私として最も心配なところです。

以前は，親バカという言葉が，悪い意味ばかりでなく，よい意味でも明るく通用していたように思うのですが，どうも最近は，よい意味での親バカも少なくなりましたが，悪い意味での親バカさえもいなくなってしまったように見えます。今日は公開シンポジウムということでありますから，私たちで大いに話し合って情報公害に対する抵抗力を身につけ，お互いにみんなでよい意味での親バカ性をとりもどすようにしたいと思います。

平野(司会)：どうもありがとうございました。これで壇上のスピーカーの先生方，それぞれのお話がだいたい出つくしたような感じが致しますが，予定よりも，ちょっと時間が超過しまして，あと30分程，時間がございます。これから，フロアーの方と積極的な交流で，この会を進めさせていただきたいと思いますので，どうぞよろしくお願い致します。質問でも，ご意見でも結構でございます。もし，質問をなさる方，あるいは，壇上の提言者の人に，もう少しこの辺のことを詳しくというような場合に，誰にかということを先におっしゃって下さい。最後のところでおっしゃられると，途中，抜かして聞いてたりして，こちらで，まごつくというようなことがあると，ちょっと，お気の毒ですし，どうぞ，その辺のご配慮，お願い致します。なお，それから，記録の関係で，ご発言いただく方，必ず，所属とお名前，お願い致します。どうぞ，どなたからでもお願い致します。

金田(無所属)：定年退職いたしましたので，所属はありませんが，近藤先生にお伺いしたいのでございますが，子どもが，母親に拒否反応を示します年齢は，だいたい何歳位でございますか。個人差があるでしょうから，だいたいのところでよろしゅうございます。先生が知ってらっしゃる範囲で。

近藤：そうですね，本当に個人差が大きいですね。私の所で，勉強に参加なさったお母様の方で，３歳の子どもに手こずっておられて，その子どもが，いなければいいのにというような，親の方もそういう反応を示す位，子どもが親に対して拒否反応を示すというような例がありました。それは，非常に激しい例だったので，よくいわれます，３歳，４歳が‥‥。

金田：それでは３歳といいますと，だいたい，その次に，また赤ちゃんが，そろそろ生まれておりますね。

近藤：よく私は，この言葉は内藤先生が作られたという言葉だと伺っておりますが，「母親の声変わり」というのがありますね。年齢が，２歳ないし３～４歳のころにですね。要するに子どもが，自分の言葉を理解する年齢になると，今までは，泣くということは，何か問題があることのサインだととらえていたのをですね。泣くことはいけないことだと教えたくなる。「男のくせに」というようなね。今まで「あー，かわいそうに」と言っていたのが，たいがいのっていう年齢があるそうですが，それが，２歳から３歳の間に，親の声が変わるというようなことをおっしゃいますが，そのあたりからですね。子どもがそういう風な反応を示す場合がでてくるのではないかと思います。私がそれが一般的かどうか，よくわかりません。ただ，私の知ります一番低い年齢では，それ位あたりから，すでに，拒否的な反応を，子どもが示す場合があるということでの返事にさせていただきたいと思います。

亀谷(幼児体育研究所)：青木先生にお尋ねします。現在，都会では人格機能を高からしめるような要素は少なくなっているようなお話なんですが，先生のお話の中で，基本的な生活の技能，態度，そのようなものを習慣化する。それから，働くこと，自由の保証，達成感，集団の存在意識，これをされたわけですが，以前は，都会で，そういうものが，保証されていたのかどうかですね。そのために，以前は，自立していたのかというようなことの比較ですね。と申しますのは，今，都会では，と先生，かなり悲観的なことをおっしゃっていらっしゃって私自身，都会で住んでおりますし，都会で子どもを育てているわけで，以前は，そのようなことが都会でなされていたのかどうか，そんなことをちょっと，感想で結構ですから，お話し願いたいと思います。

青木：私の個人的な経験では，戦前型といいますのかね，家庭の中には，十分，家庭内労働もあったし，父親中心のファミリーというものが，――現在は，ハウスがあって，ファミリーがないといいますが。――様々な人格形成機能が，だいたい，ほぼ，そろっていたと。そして，親子関係学というような，最近，起こった学問等を読みましても，かっての日本の家庭には，そういう人格形成機能が，ほぼ家庭の中に具備されていたと，いうように書かれておりますが，私が知る範囲では，そういうところでございます。

それから，これは「いなか」といいましても，山村の農家ですね。行きますと，主人が家で労働している場合は，ほぼ，人格形成機能があるなということを，私は，私の活動を，行なっているところでは，非常に強く感じております。そこへ，子どもをあずけている，ということです。

手島(国際学院埼玉短大)：近藤先生にお願いしたいと思うのですけれど，先生の「親業」ということなんですけれども，仕事の，その内容なんですけれども，「心のかけ橋づくり」。たいへん大事な問題ではないかと思うの

です。そのかけ橋づくりの具体的なスキル（skill）として，「聞く」ということと，「私メッセージ」と２つ挙げておりました。ロジャースあたりも，「聞く」ということを，盛んに言っているわけなんですけれども，相手がクライエントの場合には，「聞く」ことによって，それだけで，十分，効果がでるのだろうと思うのです。ところが，子供と，親子関係といった場合にですね，その「聞く」という，子どもを助ける，援助する，ということとやはり，何か「伝達する」，そこら辺の問題があると思うのですね。前の奥沢先生が，親子の類型の中で，「放任」それから「一貫性なし」というのが増えているということの中には親の自信，どういうものを子どもたちに伝えていくのか，という問題が，非常に今，迷っているという問題があると思うのですね。ですから，かけ橋をつくると同時に，子どもに何を伝えていくのか，いわば「メッセージ」の中身ですね。そういうものでプログラム的なもの，こういうものを伝えようというような思想があるのかどうか，そこら辺について，ちょっとお聞きしたいと思うのですが，よろしくお願いします。

近藤：ご質問ありがとうございました。たしかに，クライエント――セラピストの関係と，子供――親との関係というのは違いまして，クライエントの場合には，すでに，ある一定の問題が固定化している。それに対して「聞く」という姿勢を一方的にとり続けることによってクライエントがみずから問題を解決するというのを援助するというのが，そういう治療場面での「聞く」ということですが，お話のとおり，親子の場合には，日常場面ですから，聞いてばかりはいられない。従って，「私メッセージ」が用意してあるというわけですね。これは非常に，流動的なわけです。聞いた後で，「私メッセージ」を言いたくなることもあれば，「私メッセージ」を出した後で，相手がそれに対して反発したのを，今度は，こちらが聞くということで本当に「キャッチボール」，やりとり本当の対話をしたいということの方策として「聞く」ということと「語る」ということの両方やっていこう，「語る」内容は「私のメッセージ」だ，「あなたのメッセージ」でなくて「私のメッセージ」だということで基本があるわけですが，ご質問の主旨はでは「私メッセージ」の中身は，こうあるべきだというものが，あるのかどうかということだと思います。

「私メッセージ」という言葉で表現しようとするのは，基本的には「私の感情」なんですね。ですから，「私が何を感じるか」ということであって，そこまでは「こう感じるべきです」とまでは指定してありません。それから，「私メッセージ」という言葉で表現できる，ちょっと厳密には，私どもが言います「私メッセージ」とは違うのですが，親として，子どもに伝えていきたいものがある。その中身は，こうであるべきだということについて親業は，何か言及をするのかというと，それは致しておりません。それは，あなたの生き方の中から生き様の中から出てくる人生観であり，価値観であり，社会観だと考えるので，そこまでは立ち入ろうとしていないと。私どもがやろうとしているのは，「パイプ作り」というところが私どもの特徴であり，また，限界でもあるというふうに考えております。それに関連して申し上げますと，先程，ちょっと触れましたけれども，橋の作り方は，これでだいたいわかったと，そうすると，じゃあ，自分は一体，何を橋の上に載せようとする人間なんだろかということをですね。親が，どうしても，問わざるを得ないです。普通，親の方の関係を話すときには，何を子どもに伝えるべきかということのディスカッションが多いのですね。そしてですね，それがわかればおのずと方策はあるはずだというのが，だいたいの皆さんのお考え主張されていることのように思うのですけれども，私どもの場合は，今度は，いわゆる方法のかけ橋からはいって，結局，自分は何をしたい人間なのだろうかと，自分を問わざるを得ないというふうな構造になっていますので，非常に，具体的なところから本質的なところまで，親として，自分の生き方を問うというようなところにまでこのプログラムは行きます。そして，よく言われることは「親業」で親子関係ではいっていたけれども，出ていくときには「自分業」ですね。「自分ってどう生きるんだ」ということを考えさせられますね。というような感想で，先程，青木先生がおっしゃった，結局は子どもの問題は母親の私の問題なんですね，というような感想と，非常に，似ている内容であると思いました。「親業は自分業」ということを私どもは，随分，多くの方から言われます。

堂山（主婦）：堂山と申します。子育て終わった主婦といいますか，仕事は現在，もっておりませんけれど，ずっと働いていました。青木先生に，ご質問というのではないのですが，ちょっと，私の経験を話させていただきたいのですけれども。

この山村留学というこういうお仕事，始められたの，すばらしいことだと思います。と申しますのは，私，昭和38年に，まだ，息子が小学校１年のときにですね，山村に，子どもやりたいと思いましてね，「エミール」という本を読んで，自然というものに接触させたいと思いまして，それで，その頃まだ，そういうの全然ありませんで，ただ，自分でそうやりたいと思って，それで，色

々探して，最初は知人のうちですけれども，親戚とかじゃなくて，他人のうちへですね，小学校１年，２年，４年と，夏休みに，３週間位お願いしまして，割と短い期間でしたけれども，それなりに成果があったと思います。その頃，こういうような設備，設備というか，機会がございましたら，お願いしたかったと思いますけれど。そして，私の場合は，その自然に接したいとか，もちろん，健康とかですね，色んな意味があるんですけれど，１つは，その前に，子どもが，小さいとき，離婚しまして，母子家庭だったものですから，大家族というか，普通の健康なですね。両親と兄弟がいっぱいいる家族っていうものを見せてやりたいと。それから父親がどういう家族の中で役割を果たしているかというものを，子どもに見せるようにといいまして，それから色々，勝手ですけれども，同じ位の子どもがいるうちとかですね，それから，動物を飼っているとか，まあ，夏だから，なるべく川のあるところとか，色々そういうの自分で探して，行かせたんですけれども，今，もう成人して，働いています。まあ，一人子というか母子家庭にしては，まあ，割と，社会でもちゃんとやっておりますので，これもいなかへやったおかげの１つではないかと思っています。

それから，さっき，ちょっと先生が，おっしゃいました山村留学のほとんど，私は成功していると思うんですけれど，もし，うまくいかないような例がありましたらそれはどういうような原因とお思いか，ちょっと教えていただきたいんですけれど。どうも，ありがとうございました。

青木：今，ご質問とお話なんですが，２点ほどお話申し上げたいのです。山村留学の参加の動機の中にですね，最近，母子家庭の希望者が多いのですね。これも１つの社会的な動きだと思います。今後，ますます増えるかと思うのです。ここで，特に申し上げたいのが，今まで，どうしても母子家庭というと暗いイメージ，欠損的な色彩が濃かったのですが，最近，そうじゃなくて母子家庭でもきちんとしている家もあるし，きちんとしている子どもも結構いると。多分，それは，おかあさんが父性の代行をどこかでやっているのかな，というような，私の想像なんです。それを感じておりますです。暗いイメージもないし，十分，非常にりっぱな子どもを育てていらっしゃる。まあ，長い将来，見てみないとわかりませんが，そういうことを１つ感じます。

それから山村留学の本質とか，そういうものが私は極めるには，いい点はもうどうでもいいと，あたり前なんですから。ただ，それによって生ずる欠点っていうのは一体何か，問題点は何かという，そこをつめていくのが，ここ数年の私の仕事というように考えているわけです。ただですね，終わった子どもたちが，現在もう大学生になっているものですから，追跡調査，これから始めていかなくてはならないということでございます。ただ，８年間のうちに親との間でトラブルになったことがかなりあるわけです。もう，やめてしまおうかと思ったようなこともあるわけですね。いろんな考えの方が世の中おりますから，なかなかこちらの考えどおりいかないんですが，ただ，そのトラブルのあったことが，プラスだったか，マイナスだったかすらも，まだ，結論が出ない。意外とそれはマイナスじゃなくプラスであったのじゃないかというような予想もつくわけでございます。現在の子どもたちを通してですね。言えることは，正確な調査はやっておりませんが，ほとんどの子どもが，よかったということを言っております。ただ，都会に帰って１～２年間，もうあんな「どいなか」にいくもんか，というような反発をもっているような子どももなかにはおるようですけれども。私は逆に，だからいいんだと，その少年時代の価値が必ず後で出てくるというように信じているわけです。今後ですね，山村留学のマイナス面は何かということを，つきつめていきたいと思います。ありがとうございました。

平野（司会）：いかがでしょうか。親に関する話というのが続いておりますけれども，ちょうど，まだ子どもの立場の方が大分いらっしゃいますね。その後ろの方に。子どもの方――子どもの方と言っても大分，とうの立った子どもかもしれませんが――何かございませんか。お聞きになってて，何，言ってるんだ，俺たちは――なんていうこと感じていらっしゃることないでしょうか。

私も，大学の学生相談室の中で仕事をやっておりますけれども，最近の学生たち，一般的に言うのですが，悪口と思って聞いていただいてもいいし，それがきっかけになって何か発言がでてくれば，なおありがたいのですが。最近の大学生は燃えない，見せない，それから敬遠するっていうことが，どうも，一般に根強いようですね。何か，冷めてるっていうんじゃないけれど。やっぱり，ある程度，関心ありながら無関心を装ってみたり，ぱっとそれに飛び込むことができなかったり，「見せない」っていうのは，自分の内面，さらけ出さないかわりに人にも干渉しない，お節介しないんですね。お互いつかず離れず，まあまあの線で行こうという生き方，それから，「敬遠しちゃう」っていうのは対人関係でも，物事に対処する場面でも，めんどうなことは避けてしまう。それから，集団の中で自分から責任を分担しようと

しない。何か，そんなようなところから，人との間も，それほど暖かい，本当にしっくりいったという感覚が持てなかったりするような，そんなようなことが相談の中から浮んでくることが随分あるということで，クラブ活動なんかでも，やはり，既成のクラブの中に入りますと，色々，規律があって，上下関係もあって，そんなことで，そういうところの堅苦しいところには，行きたくないから，まあ，自分たち数人で，仲良く，たこつぼ式に，その中でやれてればいいやという，まあまあの線という感じがあります。まあ，こういう風に大学生あたりの感覚というのは，だいたい押しなべてあるんじゃないかっていう気がするんです。そこに至るまでの親子関係や教育のいろんな係わりなどがあると思います。さらに，狭い親子関係から広げて，少し，話題が展開してもいいのじゃないかと思いますが，いかがでございましょうか。

吉丸(行政書士)：今日のテーマで「最近の親子関係をめぐって」ということで「めぐって」ということの落ち着く先は結局，子どもが非行に走っていくか，あるいは，健常児として育っていくかではないかと思いますんで，そうする限り，４人の今日の先生方のお話は，皆，関連していると思います。それで，私，特に感じるんですが，最近，情報がこれほど非常に過多になったせいかわかりませんが，子どもが親を殺し，親が子どもを殺し，家庭内暴力，学校暴力，というふうに毎日，新聞，テレビにない日はないくらいに，非常に多いのですが，これをすべて，まあほとんど，マスコミの影響だと思いますが，戦前にはそういったことはあまり聞かなかったですね。特に，最近，そういう風に子どもが悪くなったのかというと，そうでもないような気がするんですが，まあ一番大きな影響はテレビ，雑誌，マンガ，こういった情報を通じて影響する。つまり親子の関係でなくして，直接といいますか，間接といいますか，親子関係に何ら関係のないような原因で子どもがとんでもない非行を犯すとか，そういうことが非常に感じられるのです。現在のテレビなんか，どのチャンネルをとっても，まあ，NHKは除きますとしても，非常に簡単に人を殺したり，あるいは物を盗ったり，非行が簡単に‥‥。今，非常に流行っている子どもの言葉なんかが，ああいうところから流行ってくるような気がしてしょうがないのです。ですから，まあ，そういう点から考えますと，「親子関係をめぐる」ことよりもむしろ，「情報関係をめぐって」現在，非行が働いているんじゃないかということを痛切に感じますが，これはどなたの先生というわけじゃないんですが，お気づきになられる方は，お願いしたいと思います。

斉藤：私がさっき，テレビとか，そういうものの批判を致しましたから，きっと私が立たなくてはいけないと思って立ちましたんですけれども。そうですね，「親子関係をめぐって」ですけれど，やはり「情報関係をめぐって」というテーマが別個に必要だというご意見には私も賛成です。だけれども，さっきも，私，申しましたように，それじゃ「情報関係をめぐって」ということで，ある結論がでたとしても，どうすればいいのかというところがね，もう１つ，知恵がわかないというところが，私の気持ちなんですね。そうしますと，やっぱりね，親に戻ってくるんじゃなかろうか。親がね，そういう影響力のもとにあるにもかかわらず，一番近くに係わっている――特にまあ，子どもが幼いうちはそうですけれど――そういう者の一人として，どのように子どもに係わるかという問題に，やっぱり戻ってくるというように思います。その親自身が，何ていうか，さっき私が申しましたように，悪い情報っていうか，要するに，情報に踊らされているようでは，たいへん心もとないと。ですから，親がしっかりすべきだと。そうするとやっぱり，親業の先生にお願いするのもよろしいし，あるいは，専門家が質のいい決め手みたいな情報を，これも本を書けば，それも情報なんですけれども，いい意味の情報をもっと的確に，すべての親御さんたちに与えるような方法がないもんだろうかっていうようなことも考えますね。でも，まあ，私ひとりではなかなか答えがでてこないのですけれども，皆さんでまた，考えていこうと，他の先生方のご発言もお願いしたいんですけれど。

近藤：私，今のお話を伺いまして，病気になったら病原菌を取り除こうっていうようなお話のように聞こえたんです。でも，同じ病原菌があっても，それに冒されて，はね返す子どもと，それから病気になる子どもと，両方あるんじゃないか。今必要なのは，たしかに，病原菌の方にも私たち働きかけていきたいけれども，それに負けない体力を持つ子ども作りではないかなという気がするんです。そういう意味で斉藤先生がおっしゃったこととも重複しますけれども，親は親子のきずなを作るということがひとつの体力作りでないかと，そういう形で，親が子どもの自主性とか，判断力というものを育てていっていくことができたら，子ども自身がそういう情報を，自分でソート・アウト (sort out) といいますが，分類してですね，必要なものをとりこむという主体性を確立していくことだろうと思います。病原菌を除いたからといって，主体性が確立していなければ新しい情報にその人が接したときに，また，それに引っ張られていっ

て，ということになってしまってはいけないのではないか，という気がしますんで，確かに，病原菌に働きかけたいという気持ちをもたせるようなマスコミの存在，情報ではありますけれども，確かに，それをやりながら，同時にこちらも体力つけていかんといかんぞ，みたいな感じを私はもっております。

平野（**司会**）：時間もあとわずかなんですが，もうおひとかた，ご発言いただけると思いますので，どうか。

大沢（会社員）：斉藤先生に最後にですね，親として自信がないじゃないかというお話を承ったんですけれども，私，会社のかなり年配のひとりとしてですね，若い人を見ておりまして，会社いわゆる企業に生きて，企業で必要とするような人間ですね。平野先生が，先程，学生のお話を致しましたけれども，そういう学生さんたちがですね，企業に就職をして，企業が成りたっていき，高度成長を支えですね，これからの日本の，まあ，高齢化社会を支えていくような若い人，まあ，30から40になる，そういう年代の人がいわゆる親として自信をもつような，親のことを，うちのことを考えているような人が果たして，企業がどんな風にうけとるかという風に思ってみますとね，なかなか，そんな，うちのことを心配しているような人では，会社やっていけないということで，もう四六時中，会社のことを考えているような人でなければ，今まではいけなかったし，我々もそんな感じじゃなかったかと思うんですよ。従って，親として，自信があるような人が，果たして，企業がうけとるかというような感じも致しますので，そうしますと，また，もとに戻るのかもしれませんけれどもね，親業訓練協会さんがそのためにあるのかどうかわかりませんですけれど，そういう企業に果たして斉藤先生はどんな批判をされるのかどうか，最後に承りたいのですが。

斉藤：私，発言致しますけれど，あとで，必ずもう一度，そちらでご発言下さるというお約束で，申し上げたいと思いますが。実はただいまのご意見に対して，実は私は教育学及び教育心理学を一応自分の専門にしている者としては正反対というか，真正面，正面衝突の考えを持っております。現在の企業は，いわば，いわゆる人間性を無視するくらいに，特に男性軍をですね。それこそ働き蜂といわれれる批判が，ちょうどあたるように，働かせすぎていると，企業は忙しいかもしれません。企業は確かに，利潤というものが非常に大事かもしれません。しかし，もう一度考え直すときがきているのではないか，というふうなことを考えるんです。どうしても，子どもの成育と子どもの養育と子どもの成長というものに，我々関心を持たざるを得ませんけれども，持ち始めますと，もう絶対に，やはり，その辺のところに，何かこの穴があるんじゃないかということを気づかざるを得ないということが，日頃の感想でして，私は，6～7年前だが，7～8年前になりますか，このことを非常に強く感じたもんですから，まあ，ポピュラーな本ですけれども，サラリーマンの方々を読者に対象としようと思いまして共同出版というところから「親父学入門」などというポピュラーな随筆風のものを書いたんです。その時の私の本音がまさに，ただいま，お答えしたようなことが本音で書いたつもりでおります。ですけれど，それは，一挙にして，まあ，もちろん，会社員であることの生きがいも大いに認め，先程，私が最初に発言しましたように生きがい複数論というものに，結局，ならざるを得ないんじゃないだろうか。人間というものは，そんな単線的に生きるべきものじゃないんじゃないか。そんなふうだからこそ，定年退職後に単線的に生きてきた人がですね，定年退職後，老後になってたいへん寂しい思いをするというようなことにならざるを得ない。やはり，複数的に生きる，色々なものに生きがいを感じながら生きると，私も，遅まきなんですけれども私自身，そういうふうに努めなければいけないな，なんて思ったりしております。まあ，これが私の言いたい放題なんですけれども，どうぞ，先程のご発言の方，大沢さんですか，お願い致します。

奥沢：ごめんなさい。横からご指名もないのにしゃしゃり出まして。ちょっと，迂遠な話になるかもしれないんです。先程，平野先生が学生の，まあ，スチューデント・アパシー（student apathy）のことに触れられましたね。今のご質問は，親があまりしっかりすると，親に従うような子どもになるから，企業では困るんじゃないかと，親のことは忘れるような子どもがいいんじゃないかと。こういうことのようなんですが，私は，ちょっとそれを伺っていて思いだしましのは，総理府が主催しました各国の青年の比較のシンポジウムがございました。そこで言われたことですが，日本の青年はシラケていてですね社会的参加がないと。そういうような意気地がないとか無責任であるとか，行動力がない。ところがヨーロッパの青年は非常にその逆であるという風なことがいわれたときに，ある人が質問しましてね，それは日本の青年の本当の特徴なのかと，あるいは，その社会に対する適応のひとつの適応なんではないかと。つまり，日本は一次集団的な二次集団であると。会社もまあ，親方日の丸ですね。終身雇用型のそういう社会である。だから，そういう社会だから，日本の青年，子どもはですね，親

が甘やかしても家庭の中で大事にしても，それからまあ，望めばの延長なんていうことがあって，非常にまあ，無責任であってもですね。しかし，それは社会が，そういう家庭の状況とか，そういう家庭の親子の関係を支えるような社会全体の構造があるからそうなんである。やはり，社会的な背景があって，家庭のこういう親子関係があり，過保護的な状況が生まれていて，青年は無気力になる，その社会がですね，成育過程ではそうなのだけれども，社会に出たときの社会っていうのはですね，非常に世界に冠たる経済競争に勝っていくような企業を日本は持っていると。だから，いったんそういう社会に入いっていくと，企業に入いっていくと企業のもっている社会的な要請に十分答えていくんだと。だから，道中ではのらりくらりとするけどもですね。いったん就職すればモーレツ社員になって働いていくんだと。だから，何も心配はないんだ，という風なことを言われたことがあるんです。アメリカなんかだと，非常に自由競争で競争の社会だから，親が一刻も早く，小さいうちから，社会的なしつけをして，自主独立の精神を養っていくと，日本とは社会構造や家庭構造が違うんだから，甘やかしてもいいんだという主旨の，まあ，それ程極端ではないんですが，そういうようにもとれるようなお話を伺ったことがあるんです。ですから，私はあまり過保護ではいけないと先程は申し上げました。それが建前ではあるんですが，心のどっかにですね，まあ，これで案外いいのかもしれないと思ったりします。今のですね，子どもは甘ちゃんで，わがままであるのかもしれないけれども，しかし，その時機がくれば，そういう社会に入いっていけばですね，十分活力がある，自身をわきまえた行動をするのではないかと，こんな風にも考えることがあるんです。それは単なる私の想像だけではなくて，非行少年を最近の非行少年の心理をみていくときにですね，「反社会性」とか「非社会性」とか，こういう風に従来，考えていたんですが，ある人たちは「亜社会性」――「次ぐ」という字ですね。――「亜社会性」っていうのが，「非社会的」でも「反社会的」でない。十分，彼らはわかっている。大人の従来の目からみると，「反社会的」か「非社会的」か「未成熟」とこういうふうに見えるかもしれないけれども，案外，ドライに割り切ってわかっているんだと，自分にタッチ交代された時には，それなりに行動できると，そういうものを非行少年さえ持っているんだと，こういう風な意味で「亜社会性」「亜社会的な非行型」こういう風なことを言いだした人がいるんです。まあちょっと，まともな答えにならないかもしれませんけれど，ちょっとお話ししました。

大沢：斉藤先生が，ぜひ発言を，ということでございまして，私も，定年近い会社員でございますので，色々，悟るところがありまして，こういう所にも来ております。決して，今の企業がいいとかいうことではありませんでただ，企業がですね，期待をしている人間，――まあ，これからまた，就職の学生の募集の時機になりますけれども，――あの企業が期待している人間像というのではですね，今日の期待をした親父ですね。特に，青木先生が先程，父性の希薄という風なことをおっしゃったと思うのですけれど，父性が家庭で，父性の父親らしい生き方をするような男の人を企業は期待をしてないんじゃないかというような感じがするんですね。従って，これは非常に矛盾をしたお話なんだと思うんですけれども，今いみじくも奥沢先生が言いましたようにね，案外，それでうまくいって，日本の社会ができているんじゃないかという感じもするんですけれども，やはり，一言，決して企業がそうなんだというのではなく，一般の企業がそういうことを期待をしているんじゃないかということで，私がそうだったということではございませんで，先程，斉藤先生の「親父学入門」ですか，また読みながら勉強させていただきたいと思います。

青木：私が申し上げております父性欠如というのは，父親がしょっちゅういるんだけれども，父性のないうちもありますし，外国へ会社の仕事で，３年間出張しているのに，そのうちには，おかあさんと子どもだけのなかに父性が厳然と存る家もある。やはり，モーレツに仕事をするおとうさんであっても，その後ろ姿を子どもに見せ得ていれば，私はそこにやっぱり子どもに父親がいるんだというものをつくる。非常に抽象的な難しい言い方なんですが，あながち，モーレツ会社が不在ではないという解釈ができます。

平野（司会）：（まとめ）時間がもう過ぎましたんですが，今日の討議のところ，一人の子供が生まれまして育っていくプロセスのなかで，この部分は家庭，ここのところは学校と，はっきりと分けることは，まず，不可能でしょう。人間っていうのは全人的に，心身健康に育ってほしい。そういった個人が成長していく環境をおとなや社会が提供していく。こういったことが十分配慮されなければならないことはもちろんのことなんですが，最後に，たとえば，フロアーの方を混じえてやりとりがありましたけれども，その中でも出てきた問題，まとめて考えてみますと，ひとつのヒューマン・サポート・ネットワーク（human support network）っていうようなことが言えるかと思うんですね。一人の人間が，そうやって育って社会人となって独立していく。その人間に様々な他と

の係わりというものが生まれてまいります。その係わりひとつひとつが，その個人に対して，心身が健全に発達していくように，また，促進的な作用をするような環境であれば，これは人的にも，物理的にも，自然的にも，もちろんそうなんですが，そういうような促進的な係わりということが行なわれていけば，おそらく，その個人にとって一つの方向性というものが獲得できるんじゃないか，また，このことは確かに言える状況じゃないかと思われます。只今のお話の中でそれぞれ出てまいりましたように，共稼ぎの問題であるとか，あるいは兄弟が少ない。そのことで自分の子どもとしての役割なんかが，上下の役割とか，こういったものが十分獲得できない。私自身のことでも翻って考えてみますと，私，一人っ子で，しかも父親が小学校４年のときに死にましたんで，ですから，片親，今で言えば欠損家族で育ったと思うんですが，学校から帰ってきますと，近所の友だちっていうのが多勢いまして，そこのなかで，中学ぐらいのお兄ちゃんもいれば，まだ小学校にあがらないような子どももいる。そうすると，そういうものの集団の中でやっぱり，自分が何をしていくかっていうのが，遊びの中を通じて，随分，得てきたと思うんですね。ところが今は核家族，これは全く孤立したような状態であって，決して，他との交流というのが生まれていない。また近所の子どもとの遊びを通じて，ある種の労働体験みたいなものもしております。現在はこういったものが個々に用意されないと，なかなかやっていかれないというのが問題ですし，もうひとつ消費の文化みたいなものもあるし，物を大切にしないとか，また，しつけの問題でこういったことで問題が起こってくるかもしれませんが，こういう一人の人間を支えられるようなヒューマン・サポート・ネットワークというようなもの，これがもっと社会の中で，きちんと確立していくような，そういった素地が生まれていけば，これは人間が生活していく上で，随分，いい環境が生まれてくるんじゃないかって感じが致します。特に，子どもの教育の指導にあたる教育問題っていうことは非常に大きな役割をもっていると思いますけれど，最近，教員養成の見直しということなんかが考えられておりまして，そこの中で先生になる人っていうのは社会教育とか，あるいは奉仕活動とか，野外教育活動とか，こういった自身の体験っていうものを，その養成の中に得ていかなければならないんじゃないかと，まあ，こんなようなことが叫ばれてもおります。子どもの心身の発達に対して大人の役割っていうのがどんなものじゃなければならないか，こういったような視点から現在の教育改革の問題やあるいは家庭のあり方というもの人間関係のあり方というものを総合して考えていくようなこういう機会がたくさんもてることによって，そういう地盤が徐々に固まっていくんじゃないかって感じが致しております。

今日は諸先生方，いろいろご発言いただきまして本当にありがとうございました。フロアーの方々，皆さんご静聴くださいましてありがとうございました。また，このような機会，持っていきたいと思いますので，是非，積極的にご協力お願い致します。

閉　会